本形、或入山家、坐爐邊、偷人眼、向火乘暖、而展陰囊者、廣長四五尺、動魚兒女、而迂之作害、或能馴人而作人語、下陰晴告時變、亦怪物也、獵家捕之、敎田犬驅出而斃、復擢鷲鵰、今時臘月捕之、剝皮日晒去臭、造帽及席、甚溫柔亡寒、野人愛之、

〔和漢三才圖會三十八獸〕貍音釐　野貓　隸子　和名太奴木

按、貍有數種、而淡黑色、背文如八字者名八文字貍、皆脚短而走不速、登樹甚速、其穴夏則奥卑下、冬則奥高上、老貍能變化妖怪、與狐同、常竄土穴、出盜食果穀及雞鴨、與猫同屬、故名之野猫、或鼓腹自樂、謂之貍腹鼓、或入山家坐爐邊、向火乘暖則陰囊垂延廣大於身也、貍皮可爲鞴、

〔關の秋風〕貍の頭をやきて其灰を用ふれば、失心風を治すといへり、貍を得ならばとく〳〵出だすべしと、國中へ觸れたりければ、二三疋打ち殺して出だしけり、みるもの兩の足をひらき、その毛をわけ、ゑばし頭をかたぶけて、こは雌なりとて笑ふ、貍のかくし所の袋は、席八つゑくばかりもありといひたればなるべし、其後生ながら得たりとて、あやしき箱に入れて出だしたり、ひらき待らずば見べきやうなし、いかゞはせんと戸おしかため、一間ゑつらひつゝ、いで此ふたあけよといへど、たれしもこゝろよからずとてあけず、豐田何がしをして ゑひてひらかせたり、貍の足からめてありければ、蠢々のみにして出でもやらず、近づけばえならぬ匂ひたへず、寄合ふ人とてもなし、とく狩人へ返しあたへよとて、又ふたを覆ひ、此ふくろは見るべうもなし、むしろ八つしくばかりなりとも、かゝるがうちには、いかでその術をなしてんやとてわらひぬ、

〔兎園小說五集〕老貍の書畫譚餘○中略

貍飼養

因にいふ、北峯子の末篇にゑるされし貍庵には、予○瀧澤馬琴も一兩度たいめんせしなり、渠が當時の本宅は中橋なりしか、よくも ゑらねど、年來芝新橋の橋づめに、さゝやかなる祇店を出だして、賣卜をもて活業にせしものなり、寛政中、予は伊東蘭洲に誘引せられて、そが店に赴きて、畜ひお